

# なぜ読書をすることは大切か

## 立教大学学校図書館司書教諭コースを経て

熊谷 望（文学部教育学科初等教育専攻）

2017年度春、大学3年次の春学期から、私は立教大学文学部教育学科初等教育専攻に進むと同時に司書教諭コースの履修を開始した。履修した当初は、学校図書館や「図書館の先生」である司書教諭の仕事について何の知識ももっていなかった。ただ、高校時代留学していたドイツの中等教育学校では学校図書館は存在しなかった為、日本の学校図書館や朝の一斉読書等学校内での読書活動について客観的に捉えるようにはなっていた。なぜ学校に図書館があるのか、なぜ読書の時間が日本の学校では特に大事にされているのか、ということに疑問をもちつつ立教大学司書課程学校図書館司書教諭コースを履修した。ここでは同コースを履修したことを踏まえて、読書の教育的価値と学校図書館の意義は何かについて考える。

### 1 読書の教育的価値とはなにか

現在、学校教育においては朝の一斉読書や子どもの読書活動推進の取組等子どもに読書活動を推奨している。また、平成29年の学習指導要領改訂に伴い情報を収集し活用する情報活用能力向上が求められている。主体的に様々な情報に触れ活用することができる点において、読書活動や学校図書館にはその重要性がますます高まっているといえる。しかし具体的に、読書は子ども達にとってどのような価値をもたらすのか。司書教諭コースで学んだことを踏まえて、読書を推奨することで教育的にどのような価値があるのかについて考えた。同コースを履修する中で考えた、読書の教育的価値は以下の三つである。

一つ目は、本の中で様々な体験をする中で想像力を養うことである。本を読むことで、ただ紙に印刷された文字から登場人物の容姿や心情、起こった出来事を想像する必要がある。文字を読む前にはただの活字だったものは、登場人物の特徴や冒険の始まり、クライマックス等その物語を理解する為の大切な情報となる。その情報を基に、脳内でその物語を再構成することを通して初めてその本を理解することができる。本の中の活字を読む体験を積み重ねて、その本の中で何が起こったのか、登場人物はどのような人物なのか、登場人物の心情の移り変わりを想像し把握することが文字から具体物を想像する想像力や相手の気持ちを理解するよう努める想像力を養うことができる。

4年の春学期に履修した中山美由紀先生の「読書と豊かな人間性」の授業を受けた際、この「読書体験から培われる想像力」について特に考えさせられた。この授業では、各々が課題のジャンルに沿って読み聞かせの技術を学んだ上で、本の紹介をしたりブックトークをした。まず、読み聞かせをする際には、受ける側の想像力を壊さない様に淡々と読むこと、本の中の世界を大切に作る為に扉絵を見せてから終える等、受け手が視覚的聴覚的な情報を得て想像することを大切に読み聞かせの技術を学んだ。更に、各々が本の紹介をしたりブックトークをすることで、それぞれが本を読んでどのように想像し理解したのか、人に説明することで物語がまた再構成されていく瞬間を見た。私は、「読書と豊かな人間性」の授業を受けたことで読書とは活字と読み手の想像力で構成されることを学んだ。

二つ目は、様々な情報に触れる中で正しい情報を見抜く判断力を養うことである。文部科学省は「生きる力」を「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力」としている。これは、情報の有効性を主体的に判

断し活用する力と捉えることができる。この力を育成する為には、様々な視点や物の見方の違いを知り、様々な経験を参照して、文脈や状況の違いを繊細に考慮できるようにならない。

- 「この科学的報告は真実かどうか」(真偽判断)
- 「この企業の行動は道徳的に正しいかどうか」(道徳判断)
- 「この政策はどれほど有益なものだろうか」(価値判断)
- 「この芸術はどれほど価値のあるものだろうか」(美的判断)
- 「この地域でどの程度の規模の地震が起こるのだろうか」(蓋然性判断)
- 「この計画は実行可能だろうか」(可能性判断)<sup>1)</sup>

のように、物事に対しての価値を判断する能力の種類は多岐にわたる。様々な本に触れより多くの情報を得た後には、どの情報が最も有効性をもっているかどうか判断し取捨選択をすることが必要になる。情報化社会と言われ多くの情報にすぐアクセスし手に入れることのできる現代において、より正確な情報を得る為には判断力を養うことが最も重要であるといえる。

私は、3年の秋学期に履修した小泉世津子先生の「情報メディアの活用」の授業でメディアから受け取る情報への判断力について改めて考えさせられた。NHKのプロデューサーである小泉先生から、ニュースの収録の流れや舞台裏の話も多く聞くことで、テレビから流れる情報はある一部分を切り取られた情報でしかない、ということを学んだ。テレビ関係者がそれぞれの意図をもち様々な所で取材をしたとしてもテレビの尺の中で伝えられることは限られてしまうということを知り、一つの情報についてより多様な資料から情報を得より多角的な視点をもつことの重要性を改めて学んだ。

三つ目は、様々な種類の本に触れ合う中で自分を表現し相手のことを理解する言語能力を養うことである。経済協力開発機構(OECD)が求めるキーコンピテンシーの一つとして人間関係形成力の育成が求められている。より良い人間関係を形成するには、自分は何を考えているのか発信する力を育成することが必要不可欠である。本の中には多くの言葉が散りばめられており、その中で物を説明する表現や語彙等より多くの表現を学び吸収することができる。特に心情や状況を表す言葉について学ぶことで、実生活においても自分の状況や自分の気持ちについて自分の言葉で説明することのできる能力を養うことができる。

以上のように、読書体験を積み重ねることで、具体物や心情を想像する想像力、より正しい情報を見極める判断力、自分のことを表現する言語能力を育成することができるといえる。

## 2 何故学校図書館が存在するのか

上記においては、読書活動は子ども達に何をもちたらずのかについて考えた。では、なぜ学校という教育機関の中に図書館があるのか。子どもが本により親しくなる為、や教科内容を更に深めるきっかけとなるため等様々な理由があることが考えられるが、私は立教大学司書教諭コースで学んだことで、その理由に更なる新たな視点を得た。それは、子ども達が新たな情報を手に入れ表現することで、図書館やその学校内の知識をより豊かにする為という考えである。中村百合子先生の「図書館概論」を履修した際、ランガナタンの五法則について取り扱われ、「図書館は成長する有機体である」ということを学んだ。図書館とは情報を貯蓄し、図書館員が情報を取り出して提供し、利用者が新たな価値を創造して常により豊かな

空間へと発展させていく場所である。つまり、利用者が増え利用者の声や学びが図書館に常に生かされ続けることで、より新たな情報を更新し、より豊かな図書館となる。図書館からより多くの情報を得、得た情報を表現して学校内で再入力することで、子ども達の学びはより確かなものとなると共に図書館の中を含めた学校内の情報が更に更新され、学校図書館と学校それぞれがより豊かな情報源として機能し続けることができる。

学校という常に新たな事柄を学ぶ場において、学校図書館をより有効的に活用し子ども間での学び合いをより豊かにすることで学校内や学校図書館の情報が常に更新され、より豊かな学び舎へと発展し続けることができる。

## おわりに

立教大学学校図書館司書教諭コースを履修したことで、読書とは学びであり学習内容や日々の疑問について深い学びへと繋げることができること、言語能力や想像力等より良く生きる方法を身に着けることができることを学んだ。主体的、対話的で深い学びが推奨されている昨今、主体的に情報を求め情報の有効性を判断し議論し合う力を養うことは必要不可欠であり読書活動の経験の中で日々培うことができる。

教員として子ども達が学校図書館を利用しより豊かな読書活動や学習活動を行うために、教員自身が図書館の機能について知識をつけることを基盤にし、本の楽しさや面白さを伝え続けること、各教科の内容と図書との関わりを常に関連付けることが大切であると考え。主体的、対話的で深い学びを実現するためには学校図書館の役割について、子どもに授業を行う教員自身が知識をつけ、授業の中で学校図書館や司書教諭と連携し常に学習環境を整え新たな情報を得ることは今後更に求められることになると予想される。その為には、教員免許を取得し教壇に立つことを志すすべての人が司書教諭コースを履修し、本を読むこととは何か、学習とは何かについて捉えなおすことは、将来子どもに主体的、対話的で深い学びの授業を提供する立場として必要な学びではないかと考える。

---

1) 河野哲也「第3章 これからの学校教育とあるべき学びの形」中村百合子編『学校経営と学校図書館』樹村房, 2015, p.25-40. 引用は p.33.